

## センウィー・クロニクルに見られる「タイ国」像(II)

精霊信仰と星占い

新谷忠彦

(アジア・アフリカ言語文化研究所)

### Les “États Tais” Tels que Décrits dans la Chronique de Sënwi (II) À Propos du Rôle des Esprits et des Astrologues

SHINTANI, Tadahiko L. A

Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa

Les états tais qui se trouvaient dans la région que nous avons nommée “Aire culturelle Tai” sont à l’époque actuelle des endroits à prédominance bouddhiste théravadienne. La Chronique de Sënwi écrite en langue shan (tay) ne parle pourtant presque pas du bouddhisme, et curieusement de plus, on peut même trouver des sections qui laissent soupçonner la négligence du bouddhisme dans ces états de l’époque. Nous pouvons remarquer au contraire l’importance du rôle joué par les esprits et les astrologues dans le domaine socio-politique de ces états. Même à l’heure actuelle, on connaît bien l’importance de la croyance aux esprits et de l’astrologie tant dans la vie quotidienne des citoyens que dans les décisions politiques prises au sein de la région. On peut observer la curieuse coïncidence entre ce qui est écrit dans cette chronique en langue shan (tay) et ce qui se passe actuellement dans le domaine socio-politique.

Dans cet article, nous avons examiné le rôle joué par les esprits et les astrologues mentionnés dans cette chronique et nous avons pris en considération la différence entre le rôle des esprits et celui des astrologues. Le rôle des esprits apparaît dans les aspects relativement “positifs” et surtout ils apparaissent souvent pour résoudre les problèmes de la succession des chefs, par exemple, lorsqu’il n’y a pas d’enfant male pour leur succéder. Contrairement aux esprits, le rôle des astrologues se trouve présenté sous des aspects plus ou moins “malfaisants”. Ils participent souvent aux ruses provoquées par l’ennemi de l’état ou par la jalousie existant entre les dames de la cour.

Alors qu’il n’y a pas moyen de vérifier pour le moment si ce qui est écrit

---

**Keywords:** Sënwi chronicle, Tai cultural area, spirit, astrologist, Shan (Tay) language

**キーワード:** センウィー・クロニクル, タイ文化圏 (シャン文化圏), 精霊, 星占い, シャン (Tay) 語

dans la chronique est historiquement valable, l'importance scientifique de cette chronique ne diminue pourtant pas même si son contenu s'avère incorrect un jour, car le fait même de l'existence d'une telle chronique en langue shan (tay) a une valeur en elle-même, et nous avons intérêt à savoir pour quelle raison une telle chronique a été écrite et conservée au cours de l'histoire de cette région.

- |                            |                     |
|----------------------------|---------------------|
| 1. はじめに                    | 3.2 精霊が王位の継承に直接絡む記述 |
| 2. 仏教と関係する記述               | 3.3 精霊が王の権威を裏付ける記述  |
| 2.1 釈迦                     | 3.4 人が死後精霊（神）になる記述  |
| 2.2 パガンの A.nö,ra.tha. 王と仏歯 | 3.5 現世を律する精霊        |
| 2.3 チェンマイでのお寺と仏塔の発見        | 3.6 判断を精霊に仰ぐ記述      |
| 2.4 人質の出家と死亡               | 4. 星占い              |
| 3. 精霊信仰                    | 5. 結論               |
| 3.1 仏教信仰を否定する記述            |                     |

## 1. はじめに

シャン (Tay) 族は古くよりテラワダ仏教を受容し、自らの信仰のより所とするばかりでなく、周辺の非タイ系民族の間にも広めてきた。ところが、シャン (Tay) 語で書かれたクロニクルの一つであるセンウィー・クロニクルにはなぜか仏教に関する話は殆ど出てこない。わずかながら仏教と関係する用語が数ヵ所見られるのみで、しかも、こうした用語は本クロニクルの内容とは本質的に関係のない部分でしか現れない。その一方で、精霊信仰的なもの、あるいは星占いに関する記述が多々見られる。

仏教国緬甸<sup>1)</sup>の歴史の中で、ナツ信仰や星占いが重要な役割を果たしてきたことは周知の事実であり、また、現代社会においても無視できない機能をもっているが、シャン

(Tay) 語クロニクルにもそうした記述が多く見られることは大変興味を引かれるところである。センウィー・クロニクル解題の第二回目として、そうした精霊信仰や星占いなど、彼らの政治・社会生活を支えている精神的側面に関する記述を探ってみたいと考える。

使う資料は前回とまったく同じものであり、資料に関する説明、および、それに基づいて作成した、本書に登場する主要なムンに関する年表は前回の拙稿を参照されたい<sup>2)</sup>。

## 2. 仏教と関係する記述

本書には仏教に関する記述は基本的にない。ただ、多少なりとも仏教を背景とした用語がいくつか現れてくるので、それらを拾い集めてみる。

1) ビルマかミャンマーかと云う意味のない議論を避けるため、本稿では漢字で書いた緬甸を使うことにする。どちらに読んでも構わない。

2) 「センウィー・クロニクルに見られるタイ国像 (I) 一王の資格をめぐる一」、『アジア・アフリカ言語文化研究』66号, 2003, pp. 276-283

## 2.1 〈釈迦〉

本書に出てくる年号はすべて緬曆（パガン曆）<sup>3)</sup>であるが、次の部分にのみ佛曆にかかわる年号が出てくる。

(1) 《釈迦牟尼が涅槃に入ってから 1274 年が経ち、92 年<sup>4)</sup>となった。その頃 Mäng:Maaw:<sup>5)</sup> は Maan;cë;tông; と呼ばれていた。》(p. 3)

## 2.2 〈パガンの A.nö,ra.tha. 王と仏齒〉

パガンのアノーラター王が仏齒を求めて旅立った帰りに Mäng:Maaw: に立ち寄った話が 2 ヶ所に出てくる。

(2) 《419 年<sup>6)</sup>に至り、パガン国の A.nö,ra.tha. 王は Mäng:Wong. に仏齒を求めて行った帰りに Mäng:Maaw: に立ち寄り、Mäng:Maaw: の Caw;pha.longHom,mäng:<sup>7)</sup> は娘の Cö:mun,la. を A.nö,ra.tha. に献上した。》(p. 16)

(3) 《Weng:Pu:kam, の名前については、パガンの Caw;Nö,ra.tha.<sup>8)</sup> が仏齒を求めて Mäng:Wong. へ行った帰りに Mäng:Maaw: に立ち寄り、この場所に泊まったことから Mäng:Pu:kam, と呼ばれるようになったものである。》(pp. 29-30)

## 2.3 〈チェンマイでのお寺と仏塔の発見〉

センウィー王 Caw;longKham:hip,pha.<sup>9)</sup> はチェンマイ、チェンセーン、チェンハーイ<sup>10)</sup>の三人の王の求めにより、彼らの緬甸王への朝貢に付き添った。帰路、緬甸王の命により、三人の王をそれぞれの国に送り届けたが、その際、チェンマイでお寺と仏塔を見つけている。

(4) 《そこで Caw;longKham:hip, と牛飼いと若い男たちは Weng:Keng:May,<sup>11)</sup> の町中をあちこち見て回り、町の南東の方に大きなお寺<sup>12)</sup>と大きな仏塔<sup>13)</sup>を見つけた。》(p. 41)

この部分に前後を付けると、当時のセンウィーでは仏教が知られていなかったことになるが、このことについては後述する。

## 2.4 〈人質の出家と死亡〉

センウィーに対する緬甸王の支配が強くなるに従って、王が自らの親族を緬甸王の元に“人質”として出すようになるが、この“人質”として出していた人物が出家し、僧衣をまとして旅先で死亡したとの記述がある。

(5) 《Caw;KhunKham:hung; は父王の命により、緬甸へ行って緬甸王の側用人をつとめていたが、Mäng:A,wa. で死亡した。この人は Pha.Khunli という名の男の子を一人残していた。Caw;Pu,Kham:song,pha.<sup>14)</sup> は

3) 緬曆の元年は西曆 638 年に始まる。

4) 93 年の間違いではないか。

5) シャン (Tay) 語の転写法については、新谷忠彦, Caw Caay Hän Maü, 『シャン (Tay) 語音韻論と文字法』, 2000, アジア・アフリカ言語文化研究所刊を参照。

6) 西曆 1057 年。

7) 後期 Mäng:Maaw: の第 2 代の王。

8) アノーラター王のこと。

9) Sēnwi の第 11 代 (新 9 代) の王。

10) 現在のチェンラーイのこと。

11) チェンマイのこと。

12) 原文では wat.long。

13) 原文では kōng:mu:long。

14) Sēnwi の新々第 11 代の王。

自分の子 KhunKham:hung; が死亡した後、この Khunli に人質として Mäng:A,wa. へ行くよう命じた。その時、緬甸王は（人質に）Keng:May, 攻撃を命じた。それから帰って来て1, 2年経ったころ、（彼＝人質は）僧衣をまとい出家した。その後東側の諸国へ出かけ、サルウィン河を渡って Weng:Keng:Tung<sup>15)</sup> を過ぎたところで泥棒に取り囲まれ、旅行中に僧衣のままで死亡した。》(p. 48)

以上が本書に現れる多少なりとも仏教と関係のある用語のすべてである。このことから、本書は仏教とはまったく関係のない背景を前提として書かれたものであることが分かる。

### 3. 精霊信仰

“精霊”という用語をここでは使ったが、本書で使われている原文のシャン (Tay) 語は phi である。非常に具体的で人界とは別の世界に住む存在として描かれてはいるが、現世に生きる人間と同じような行いをなし、またこの世に生きていた特定の人が死後精霊となる場合もあり、日本語の“神”に近い概念かもしれない。基本的に現世の人に対して何か悪いことをする存在ではない。従って以下に抽出するシャン (Tay) 語文の日本語訳では、現れてくる状況に応じて“精霊”を使ったり“神”を使ったりしているが、原文ではすべて同じ phi である。

精霊が出現する場面は王位の継承に絡む場合が多く、また、夢の中に現れて現世の人に指示するパターンが中心となっている。

#### 3.1 〈仏教信仰を否定する記述〉

本書は仏教について語らないばかりか、次

のように、(4) の引用文の前後を付けると、当時のセンウィーでの仏教信仰を否定するような記述が見られる。

(6)《Caw;longKham:hip,pha. は Keng:May, 王からの贈り物を受け取った後、Weng:Keng:May, に2ヵ月留まった。帰る日が近くなったある日、Caw;longKham:hip, は牛飼いの Aay; に対して「われわれの出発日が近くなってきた。他の人たちに Weng:Keng:May, はどのような町であるのか、また、町の中には何があるのか、十分説明できるように、町中を散歩して見ておこう。」と言った。

そこで Caw;longKham:hip, と牛飼いと若い男たちは Weng:Keng:May, の町中をあちこち見て回り、町の南東の方に大きなお寺と大きな仏塔を見つけた。そこで (Caw;longKham:hip, が)「入って見よう。」と言って、その大きなお寺の中に入ってしまった。中に入って仏像<sup>16)</sup> が5体並んでいるのを見つけ、主従は「この国では精霊の像<sup>17)</sup> がある。ひとつわが国へ持って行って住民たちに見てもらい、もしこの像が本当に良いものなら<sup>18)</sup>、われわれもこの国の人と同じように、(この像を)信仰しよう。もし何の御利益もないのなら、子供たちにあげて遊び道具にすればよい。おい、牛飼い。それをひとつ抱き上げてみろ。それは木でできているのか、それとも他の何かで作られているものなのか。」と言った。そこで牛飼いは進み出て持ち上げようとしたが、とても重く、それは木製ではなく、金属製であった。今度は Caw;longKham:hip, が4体の像を手で持ち上げようとしたが、とても重く、持ち上がらなかった。しかし1体だけは比較的軽かった。そこで、

15) チェントゥンのこと。

16) 原文は hun,hang;phra: であって、“精霊”あるいは“神”とした phi とは異なる。

17) 原文では hun,phihaang;phi である。

18) 御利益があるものなら、の意。

Caw;longKham:hip, はその比較的軽い方の像を持ち上げた。牛飼いは他人に見られるのを恐れて、(その像を) 布で包んで持ち出し、自分たちの宿泊場所に隠した。それから2日後、朝早くに Caw;longKham:hip,pha. はキャンプを畳み、従者を集め、荷物を整理して Weng;Keng:May, を出発し、帰って行った。時に 833 年<sup>19)</sup> のことである。

帰路の途中、牛飼いは(像を) 布に包んで馬の背中の後ろの方に吊るし、自分は前の方に乗っていたが、しばらくするとその像は前の方に来ていた。このように後ろに乗せていても、いつの間にか前の方に来てしまうことが毎日繰り返された。そこで主従は「これは恐れ多いことだ。この像はわれわれが後ろに置いていてもすぐに前の方に移ってゆく。本当に恐れ多いことだ。ゼひ国まで持って運ぶべきだ。」と言った。彼らは慎重に持って運び、一人ずつ交代しながら、持って国までたどり着いた。

そこで彼らは「この精霊の像は御利益があるのかないのか、栄光が大きいのかそうでないのか、温泉の熱い湯の中につけてみよう。」と言って、温泉の熱い湯の中に持って行って沈めた。すると、湯はたちまち冷たくなったので、彼らは「Māng:Yon:<sup>20)</sup> のこの精霊の像はとても大きな栄光を持っている。」と言った。そこで Caw;pha.long は官僚と住民皆に対して「この精霊の像は栄光が大きく、とても強いので、この像を怒らせてはいけません。国の聖木を切って祠を作り、豚を殺し、鶏を焼き、牛、水牛を供えなさい。」と言った。そこで命令通りに精霊のための祠を作った。夜になって仏像は逃げ出し、見えなくなってしまった。》(pp. 73-74)

この文章を文字通りに解釈すれば、当時のセンウィーでは仏教が知られていなかったことになり、同時に、当時のチェンマイでは仏教が信仰されており、センウィーはチェンマイから仏像を盗んで来たことになるが、果たして事実はどうなのであろうか。また、もしこのことが事実でないとするならば、それではなぜこのようなことを書いたのであろうか、その背景を知りたいものである。

### 3.2 〈精霊が王位の継承に直接絡む記述〉

精霊が現れる場面は、何らかの形で王位の継承に絡む場合が圧倒的に多い。その中でも王の継承資格者である男の子の出生に絡んだり、誰を継承者にするか決める場面を以下に拾い上げてみる。

(7) 《Caw;KhunKom:<sup>21)</sup> の御世に至り、従者および侍女は 100 人もいたが、男の子は一人もなく、王は、もし自分が死んだら後を継ぐ者が誰もいなくなるので、これから先、女たちには皆それぞれ男の子ができるように神にお祈りさせ、自分もまたお祈りを始めた。こうして女たちは皆、王の命令通り、それぞれ毎朝毎晩、子供ができるようにお祈りした。

ある日、深夜の 12 時を過ぎて精霊が Caw;pha.longKhunKom: の夢の中に現れ「Caw;pha.longKhunKom: よ。もしお前が男の子を欲しければ、イラワジ河のほとりで 7 日 7 晩お祭りをしなさい。そうすれば水が流れてきます。そうしたら、そこに流れてきた金の卵を女たちに食べさせなさい。その卵を食べた女は誰でも男の子を産むことができます。」と言った。Caw;pha.longKhunKom: は就寝中にこのような夢を見たので、朝になって目覚めた時、官僚たちと住民たちを呼び、イラワジ河で 7 日

19) 西暦 1471 年。

20) チェンマイのこと。

21) Māng:Mit; の第 3 代の王。

7晩に互って祭りを行いたいと言った。そこで、国中の主従すべてが集まって、イラワジ河のほとりで7日7晩に互って祭りを行ったところ、雨・風が毎日止むことなく、(人々は)金の卵が流れてくるのを待ち受けていた。しかし、金の卵は流れて来ず、7日が経ち、祭りをたたくでそれぞれ国許へ帰って行ったが、(王には)夢の中に現れた精霊の言葉が忘れられず、若い女一人を見張り役と一緒にその河のほとりに留めておいた。王が宮殿に戻って行った後、見張り役の人皆がいちじく<sup>22)</sup>が一個流れてくるのを見つけ、彼らはそれを拾って若い女に与えた。若い女はそのいちじくを受け取り食べた。食べた後も座って眺めていたが、流れてくるものは何も見付からなかった。陽が暮れたのでそろって帰り、王の元に戻って来て「私たちがずっと河のほとりで見張っていましたが、何も流れてきませんでした。ただ、ちょっと前にいちじくが一個流れてきて、皆がそれを拾って私にくれましたので、私はそれを食べました。」と若い女が話した。Caw;pha.longKhunKom:は「拾って食べたのはよいことだ。私は別にお前を責めたり、残念に思ったりはしていない。」と言ったので若い女は元通り気楽に過ごしていた。

その日からその若い女は妊娠し、10ヵ月が経って臨月に達し、子供を産む時期になった。》(pp. 12-13)

王位を継承する資格があるのは基本的に男であることは前回の拙稿の中で述べておいたが<sup>23)</sup>、男の子が生まれぬことは国の一大事であり、そうした際に精霊が登場し、問題を

解決に導く形になっている。また、次の場面も同じように男の子がなくて困っている状況の場面である。

(8)《Caw;pha.longMëw,pong;<sup>24)</sup>は歳をとっても男の子がなかった。そこで彼は非常に悩み、男の子が欲しくてたまらず、毎日 Ruk.kha.co: 神<sup>25)</sup>、Phung,ma.co: 神<sup>26)</sup>にお祈りしていた。ある日、Caw;pha.longMëw,pong;は若い女の宮殿に入った。その時、その若い女はCaw;pha.longに「あなたはこれまで私の宮殿に入って来たことはありませんでしたが、ここ5、6日間よくいらっしゃいますね。」と言った。Caw;pha.longMëw,pong;は「これまでここに来たことはない、今日だけだ。」と言って不機嫌になり、人に命じて(彼女を)監視させた。夜中になって Ruk.kha.co: 神が現れ、若い女の宮殿へ入って行った。人々はそれを見て、皆で捕まえようとしたが、捕まえられず、その神は走って宮殿の屋根の上に上り、「Caw;pha.longMëw,pong;よ。お前は男の子が欲しくて毎日神にお祈りしているが、今、私こそ、他にもない、Caw;pha.longHom,mäng;<sup>27)</sup>が神になった姿である。これを信じるかね。」と言った。その時、その神は靴の片方を取って投げ、「Caw;pha.longMëw,pong;よ。もしお前が本当に男の子が欲しいのなら、この靴を信仰しなさい。」と言って消えてしまった。Caw;pha.longMëw,pong;は「この若い女は私に対して正直ではない。その振る舞いは正直ではない。私の命がある間は、その父母、その兄弟の誰とも会うことができないように、彼女にMäng:Maaw:

22) 原文は maak,lä, (*Ficus lanceolata*)。

23) 「センウィー・クロニクルに見られる「タイ国」像 (I) —王の資格をめぐる—」、『アジア・アフリカ言語文化研究』66号, 2003, pp. 275-298

24) 後期 Mäng:Maaw: の第3代 (新初代) の王。

25) 木の神。

26) 地の神。

27) 後期 Mäng:Maaw: の第2代の王。

の南から北まであらゆる場所で乞食をして生活させ、宮殿には居させず、今日限り追い出そう。」と言った。そこで、その若い女は非難を浴びて宮殿を離れ、Mäng:Maaw: の南から北までの至る所で乞食をしながら行ったり来たりするようになった。

若い女は妊娠して10ヵ月になり、LöyLaaw のふもとの Nam.kaay,mö; 村で男の子を3人産んだ。》(pp. 17-18)

ここで生まれた三人の男の子のうちの一人が、シャン (Tay) 族歴史上の大王とされる後の Caw;longSäkhaan,pha.<sup>28)</sup> となる。この中では王が死後に神 (精霊) となる話が出ているが、別のところでも人が死後に神 (精霊) となる話があって、その点については後でもう一度触れたい。さて、このようにして3人の男の子を授かったものの、子供がまだ幼いうちに王は亡くなってしまふ。そこで王位の継承をめぐる再び精霊が登場することになる。

(9) 《KhunYi;khaangkham: 兄弟<sup>29)</sup>の年齢が5歳になった656年<sup>30)</sup>に父親の Caw;pha.longMëw,pong; が亡くなった。息子の Caw;Yi;khaangkham: は未だ幼少だったので、国を継承する人がなく、官僚たちが考えあぐねているところへ、精霊が官僚の一人の夢の中に現れ「官僚たちよ。もしお前たちが国を幸せにし、名高くしたいと思うなら、Naang:I,kham:lëng:<sup>31)</sup> を王にするが良い。」と言った。精霊が夢の中に

現れてこのように言ったので、官僚たちは Naang:I,kham:lëng: を王にかつぎ上げた。》(pp. 18-19)

王となる資格を持つ者は基本的に男だけであるが、本書の中では例外として4人の女性の王が登場する。この Naang:I,kham:lëng: はその中で最初の女性の王である。

### 3.3 〈精霊が王の権威を裏付ける記述〉

精霊が王の権威を裏付けるような役割を果たしていると考えられる場面がいくつか見られる。以下にそれらを拾ってみる。

(10) 《KhunYi;kwaay:kham:<sup>32)</sup> はこうして Mäng:Cun,ko: へ着いた。父の Caw;KhunKo:<sup>33)</sup> はとても喜んで、7日7晩大きな祭りを行って、皇太子として認め、Caw;KhunTing,<sup>34)</sup> の子 Naang:I,Pum を貰い受けに行き、二人を結婚させ、長く一緒に暮らさせた。このとき精霊が現れ、KhunYi;kwaay:kham: に一本の刀を差し出した。祭りが終わり、立太子式も終わって、このニュースは Caw;Wong.te,hösëng<sup>35)</sup> の元に伝わり、(Caw;Wong.te,hösëng は) 家臣を遣わして Caw;Yi;kwaay:kham: に自分に会いにくるよう伝えた。そこで639年<sup>36)</sup> タイ暦 lap:sai; の年に KhunYi;kwaay:kham: は Caw;Wong.te,hösëng に会いに行った。Caw;Wong.te,hösëng は父親の KhunKom: と一緒に国を治めるよう命令を下した。》(pp. 14-15)

28) 後期 Mäng:Maaw: の第5代 (新3代) の王。

29) 生まれた3人の男の子のうち1人は早くに亡くなり、この時点で生存していたのは2人だけである。また、KhunYi;khaangkham: は後の Caw;longSäkhaan,pha. の幼名である。

30) 西暦1294年。

31) Caw;pha.longMëw,pong; の二女。

32) Mäng:Mit; の第4代の王。

33) Mäng:Mit; の第3代の王。

34) Mäng:Ka.le;/Weng:Sä の王。

35) 中国皇帝を意味する言葉ではあるが、ここに出てくる人物が実際に中国皇帝であったかどうかは疑わしい。

36) 西暦1277年。

(11) 《ここで Mäng:Maaw: の方に話を戻すと、657年<sup>37)</sup>に Caw;pha.longMëw,pong; が亡くなり、Naang:I,kham:lëng: が王となったその時は KhunYi;khaangkham: と KhunSaamlong 兄弟二人とその母親の三人はまだ LöyLaaw のふもとの Nam.kaay,mö; 村に住んでいた。母子三人は畑を耕して生活していた。KhunYi;khaangkham: と KhunSaamlong の二人は成長して15、6歳になっていて、二人の兄弟は畑を耕し、米を作り、豆を植え、きゅうりを植え、年老いた母親を養っていた。ある夜、国の神、木の神と一緒に KhunYi;khaangkham: の夢の中に現れて「KhunYi;khaangkham: よ。お前たち二人がもっと良い生活をしたと思うなら（私の言うことを聞きなさい）。お前たち二人の畑の北側<sup>38)</sup>に大きな石がひとつある。その大きな石の下に印鑑が一個あるので、それをお前たちの家に置いておきなさい。」と言った。KhunYi;khaangkham: は夢の中で精霊にこのように言われた。朝になって起きてきて、朝食を食べた後、兄弟二人はいつものように一緒に畑に出かけた。その時 KhunYi;khaangkham: は精霊が現れて告げたことを弟の Caw;KhunSaamlong に伝え、二人の兄弟はそろって畑の北側に行って眺めたところ、実際に大きな石をひとつ見つけた。そこで兄弟二人はてこを使ってその大きな石を持ち上げたところ、精霊が夢の中で言った通り、印鑑が見つかった。兄弟二人は、それがそんなに重要なものとは知らなかったの、それを箆に入れておいた。お昼を大分過ぎたころ、兄弟二人は一緒に畑を後にして家路についた。帰宅の途中、いろいろな人に出会ったが、彼らは「殿下、お二人はどちらに行き来られた

んでしょうか。」と言って合掌して尋ねた。二人は「畑に行き来しました。」と答えた。こうした人たちと別れて、兄弟は「今はどうしたんだろう。いつもと違うな。会う人みんなが気が狂っているみたいで、自分たちを分かっていない。今しがたわれわれに会った人はお辞儀をして合掌して尋ねていたよ。このような人は本当に気の狂った人だよ。」とお互いに言葉を交わした。兄弟はこのように話しながら家に帰り着くと、二人の兄弟を見に現れた人たちが皆同じような振る舞いをした。その時二人の母親が事情を尋ねたので、兄弟は母親に事の仔細を話した。精霊が KhunYi;khaangkham: の夢の中に現れ、特別なことは何もないのだが、精霊が夢の中で渡してくれた丸い石を一個拾った、と言った。その時、母親がそれを見せるようにと言ったので、Caw;KhunYi;khaangkham: は取り出して母親に渡した。母親はそれを隠し、誰にも言わないようにと言いつけた。》(pp. 20-21)

(12) 《この日の翌日、二人の兄弟が家の近くに茅を刈りに出かけたところ、国を守っている Ruk.kha.co: 神が虎の姿で現れ、Caw;KhunYi;khaangkham: の背中に飛びかかった。しかし虎は彼を咬むことはできなかった。その時二人の兄弟が大声を出して叫んだところ、虎は森の中に逃げて行ってしまった。それからしばらくして、二人の姉の Naang:I,kham:lëng: は王となって16年が経ち、673年<sup>39)</sup>に亡くなった。その後官僚たちは KhunYi;khaangkham: を同年に王として擁立した。KhunYi;khaangkham: は虎に背中を咬まれた逸話から、Caw;longSäkhaan,pha.<sup>40)</sup> と呼ばれる王となった。》(p. 21)

37) 西暦1295年。ただし、656年（西暦1294年）の間違いではないか。

38) あるいは「上の方」とも訳せる。原語はnäである。

39) 西暦1311年。

40) 後期 Mäng:Maaw: の第5代（新3代）の王。



(10) では精霊が王の後継者に刀を差し出し、(11) では印鑑を与え、(12) では国神が虎の姿で現れている。王の象徴として印鑑が重要なことは前回の拙稿の中で既に述べておいた<sup>41)</sup>。また、この Caw;longSäkhaan,pha. 以降、Mäng:Maaw: に限らず、シャン (Tay) 王の名前には「虎」の付いた名前が圧倒的に多く現れる。現在に於いても、「虎」はシャン (Tay) 族の象徴的な存在となっている。

### 3.4 <人が死後精霊（神）になる記述>

人が死後精霊（神）になる話は (8) の引用文の中で出てきたが、もう一カ所 Caw;longSäkhaan,pha. が自分の弟 Caw;KhunSaamlong を司令官として Mäng:Woy,sa,li, を攻撃させ、勝利を取めたが、密告者の言葉を信じ、Caw;KhunSaamlong に疑いを抱いて、毒を入れた食事を食べさせ、それを食べた弟の Caw;KhunSaamlong が死後精霊となった話が出てくる。

(13) 《兵は Mäng:Woy,sa,li, を離れ、中間点に達した頃 Taaw.säyen:/Taaw.pha.lö, の二人は「Woy,sa,li, のやつらは小心者でどうしようもない。彼らは人口が多く、水牛飼いの子供だけでもわれわれの兵の数を上回っているのに、われわれと戦争することをせず、簡単に降伏してしまい、本当に弱虫なやつらだ。」と言った。Caw;Saamlong はこれを聞きつけ、「お前たち二人はそのようなことを言うてはいけません。彼らは偉い人たちだから、贈り物を用意し、銀、金を送ってきたのであって、お前たち二人のようにけなすのは良くない。」と言った。Caw;Saamlong が二人をこのように論じたところ、二人は脅威と恥ずかしさを感じて、こっそりと使いの者を先に行かせ、Caw;longSäkhaan,pha. に「われわ

れ主従の者は公務によって Mäng:Woy,sa,li, に征き、あらゆる分野で勝利を取めました。Mäng:Woy,sa,li, の人はいろいろな贈り物を用意しました。しかし、王様の弟の Caw;Saamlong は正しく行動せず、いやしくも Mäng:Woy,sa,li, の人との間で次のような取り決めをしてしまいました。自分の国に戻ったら、自分の王を捕まえて人質としてあげるよ、と。そして、Caw;Saamlong 自らが王となる、と言いました。これは本当の話です。われわれ二人は主人に完全に従う従者であり、主人をととても敬愛しておりますので、彼ら（のたくらみ）に加わることはできません。彼らのやり方がどうなのかわかった以上、自分たちの主人に知らせないわけには行かず、お知らせするために来ました。」と伝えた。Caw;longSäkhaan,pha. は Taaw.säyen:/Taaw.pha.lö, の二人が人を介して伝えてきたこの知らせを受けると、何も考えずに、伝えられたその言葉を信じ、金の器と銀の蒸し鍋にととてもきれいな食べ物盛り、そこに砒素を入れて、使者に持たせて、王の使いとして Caw;Saamlong の元へ送って、食べさせるようにと伝えた。Caw;Saamlong は事情を知って、すべての兵および Mäng:Woy,sa,li, の人に呼びかけた。「皆さん、われわれは彼<sup>42)</sup>のために仕事をして Mäng:Woy,sa,li, の領土であらゆる勝利を取って帰って来ました。なのに、彼は私たちを信用しないで、ほかの二人がわれわれを中傷したのを信じて、食事を作ってそこに砒素を入れて私に送って来ました。私はこれを食べ死にますが、Mäng:Woy,sa,li, の方々、われわれに贈り物を持ってきた方々は、この国に到着後、お帰りなさい。贈り物については、Taaw.säyen:/Taaw.pha.lö, と兵

41) 「センウィー・クロニクルに見られる「タイ国」像（Ⅰ）—王の資格をめぐる—」、『アジア・アフリカ言語文化研究』66号、2003、pp. 292-293

42) Caw;longSäkhaan,pha. のこと。

隊たちに Caw;longSäkhaan,pha. の元へ持って行かせなさい。あなた方は帰って行っても、われわれが約束したように、2年に一回、3年に一回、朝貢品として反物、金、銀を用意してこの国にいつも届けなさい。あなた方が帰って行った後、私は Caw;longSäkhaan,pha. が私に食べるようにと届けた食事を食べましょう。」 Mäng;Woy,sa,li, の人たちは帰って行き、Caw;Saamlong は食事を食べた。彼は死んでこの国<sup>43)</sup>で PhiSa.mäng:<sup>44)</sup> になった。》(p. 25)

### 3.5 〈現世を律する精霊〉

精霊が公正な神として、現世の悪事を正す行為を Caw;Wong. 母子が犯した母子相姦に関する次の文章の中に見て取ることができる。ただ、ここに出てくる精霊(神)はインド神話に由来するもので、創世神話も含め、本書全体にインド神話の影響が感じられる。

(14) 《さて、Ma,ta.li. 神<sup>45)</sup>と Wi.sa.kyung, 神<sup>46)</sup>の二人の精霊が人界に降りて来て、人界の書記と Caw;Wong. の書記を連れてインドラ神<sup>47)</sup>に読んで説明させたところ、インドラ神は事情を知って怒り、「Caw;Wong. 母子は不徳を行い、バカで野蛮な行為を行っており、人倫を逸脱している。」と云ってのろしを上げ、それが降りて来て白虎となり Mik.thi.la, の町を荒らし回った。君主住民皆一緒になって(白虎と)戦ったが、その虎はインドラ神が送り出した虎であったため、勝つことができなかった。皆で捕まえようとしたが、これも駄目だった。この白虎は 8sök,<sup>48)</sup> の背丈があり、とても早

く、一日に三つの国を駆け抜けることができた。》(p. 16)

### 3.6 〈判断を精霊に仰ぐ記述〉

政を行うに際し、どのような行動をとったらよいか迷った時に、その判断を精霊(神)に仰ぐ光景が次の文章の中に出てくる。

(15) 《そこで Caw;Naang:pha.hom,mäng:<sup>49)</sup>と Caw;Kham:kaay,pha.<sup>50)</sup>に住民たちを加えて相談したところ、皆一様に「今 Caw;Wong.te,hösäng がまた、援軍を送るようにと云って来たし、Säki;/Sängam: の方も援軍を送るようにと云って来ている。では、われわれはこの両者のどちらを支援すべきだろうか。」と質問を投げかけた。その時、官僚、王、住民は皆「われわれはどちらを支援しようか話し合ったが結論が出ない。そこで神を呼んでそのお言葉に従うことにしよう。」と言った。そこで「兵を出して Caw;Wong.te,hösäng を支援すべきかどうか」と云って供物を用意して神に尋ねた。老人に白い服を着せて、神の祭壇の近くに行かせて願い事を言わせた。(老人は)「神様、われわれは Caw;Wong.te,hösäng を支援すべきか否か、目に見えるようにお示してください。」と云って、口の中に水を含み、両方の手で両方の耳をふさいで祭壇を離れ、道を歩いて町に着き、そこで口の中の水を吐き出し、両方の耳を開いた。その時、ほえ鹿が二度鳴いたのが聞こえた。このしるしの意味を解釈すると、蛇の顔は吉で、ほえ鹿の顔は凶であるとするとする古い言い伝えがあるところか

43) Mäng;Köng: のこと。

44) 聖木の精霊。

45) インドラ神の御者。

46) インドラ神の仏師で建築の神。

47) 原文では KhunSi.kya: となっている。

48) 長さの単位で、1sök, はひじから指先までの長さを表す。

49) Sënwi の第7代(新5代)の王。

50) Sënwi の第8代(新6代)の王。

ら、Caw;Wong.te,hösəng を支援することは否となる。この後、前と同じようにして Săki;/Sāngam: を支援することは是非かを神に告げて、答えを示してくれるようお願いをして、水を口の中に含み、耳をふさいで、町に戻って来て、水を吐き出し、耳を開いた。その時ほえ鹿が四回鳴くのが聞こえた。そこで彼らは、2回は機の神の行いであり、4回は荒々しい豚の行いであるとする古い言い伝えに従ってこのしるしを解釈した。「初めは Caw;Wong.te,hösəng を支援すべきかと神に伺ったのに対し、ほえ鹿は2回鳴いた。今回は Săki;/Sāngam: を支援すべきかと神に尋ねたのに対し、ほえ鹿は4回鳴いた。後にやった時が4回ほえ鹿が鳴いて、回数が多かったので、われわれは Săki;/Sāngam: を支援すべきだろう。」と言って、各国は兵を率いて Caw; longKham:kaay, と Caw;Naang:pha.hom, mǎng: の元へ駆けつけた。》(pp. 35-36)

以上、精霊あるいは神に関する記述を見てきたが、ここに現れてくる精霊や神は基本的に人に対して何か悪いことをする存在ではなく、王位の継承や人々の日常生活を律する存在として現れていることが分かる。

#### 4. 星占い

精霊が基本的に“良い”存在として現れてくるのに対し、星占いの場合はあまり“良くない”存在で、策略に加担するような場面に現れてくる。尚、星占いの原語は mǎmǎng: となっていたり möpe,taang, であったり mölong となっている<sup>51</sup> が、mǎ はシャン(Tay)語では通常“何かをできる人、特技を持つ人、名人”などの意味で使われる言葉である。

(7) の引用文の中で、一人の女が妊娠する

ことになったが、このことによって、宮殿にいる女性たちの間で嫉妬心が芽生え、他の女性たちが策略を考えるようになり、こうした策略に星占いが加担している。(7)の続きは次のようになっている。

(16)《子供を産む時期になって他の女性は皆、彼女の周りに集まって注目していた。その若い女性は目まいがして自分の身体の自由がきかなくなった。眺めていた他の女たちは皆、生まれてきた子供に対して嫉妬心を抱き、「子供を足の踵で踏みつけて殺してしまえ。」と言って、その母親には血の付いた布の塊を見せて「あなたの産んだ子は人の子ではなく、血の塊が出てきただけなんです。」と言った。女はしばらくの間失神していたため、他の女たちの言ったことを信用するようになった。彼女たちは皆、事実を隠して、若い女に知られないようにしておいた。それから、彼女たちは生まれた子供を見に行き、死んだと思っていたのにまだ死んでいなかったことに気づき、牛飼いを一人呼んで、その子を牛が出入りする路上に捨て置くように命じた。そこで牛飼いは、女たちが言った通りに、子供を持って行って牛が出入りする道の真中に捨てた。朝になって、牛が皆牛舎を出る時になり、群れの頭目の雌牛が最初に出てきて、子供が道の真中に置かれているのを見つけ、他の牛にこの子を避けるよう命じた。そして、その頭目の雌牛が子供を口の中に入れて森の中に連れて行き、そこに置いてミルクを十分に与え、遠くには行かずに、その子供の周りで草を食べていた。夜になって、牛たちが牛舎に戻る時、縞の頭目の雌牛は(その子を)口の中に入れて帰った。こうしたことを毎日繰り返し、一年が経ち、子供が歩けるようになった。女たちの方は、子供が見えない

51) mǎng: は“国”の意であり、pe,taang, は緬甸語の beding “星占い”からの借用語であり、long は“大きい”を意味する。

ので、死んでしまったものと考えていたが、ある日、その子が頭目の雌牛の背に乗っているのを見つけた。そこで、牛飼いが牛が帰ってくるまでをずっと眺めていると、(その子が) 縞の雌牛の口の中に入って隠れたので、牛飼いはそのことを女たちに伝えた。そこで、女たちのリーダーは皆に病気のふりをさせ、星占いを呼んで、「もし Caw;pha.longKhunKom: が、あなたがた星占いに対して「宮殿の女たちが皆病気になってしまったのは、星によって引き起こされた国内中に及ぶ流行病なのでしょうか。また、自分にも及ぶものなのでしょうか。」と尋ねてきたら、「国内や王様の身に及ぶものではありません。(宮殿の女たちについては)、聖木を切り、祠を建てれば女たちの病気は消えてしまいます。また、縞の頭目の雌牛を神に捧げれば終わります。もしそうしなければ、宮殿の女たちは皆死んでしまうばかりか、王様御自身の身に及ぶことになります。」と答えてください。」と言った。女たちはこのように言い、星占いはこれを引き受けた。その後、Caw;pha.longKhunKom: は星占いを宮殿に呼び、女たちの病気はどうしたのかと尋ねた。そこで星占いは Caw;pha.longKhunKom: に対して「聖木を切り、祠を建てて国神を祭りなさい。そして、縞の頭目の雌牛を生贄として神に捧げれば全て終わります。」と告げた。そこで Caw;pha.longKhunKom: は星占いの言ったことに従い、従者を呼び、祭壇を作り、縞の頭目の雌牛を神に捧げるように、と伝えた。縞の頭目の雌牛はそのことを聞きつけると、子供を吐き出し、(その子供を) 曲がった角の頭目の雌水牛が代わって呑み込んだ。縞の頭目の雌牛は KhunKom: が連れて行って殺し、神に捧げた。宮殿の女たちは皆、病気のふりを止め、元に戻った。》(pp. 13-14)

女たちの嫉妬心に基づく策略は更に続き、星占いの加担も続く。

(17) 《曲がった角の雌水牛が口の中に呑み込んで行った後、5, 6, 7日経ち、曲がった角の雌水牛が子供を口に含んでいるのを(飼い主が) 見つけ、この子は精霊なのだろうかそれとも人間なのだろうかと自問した。この子が曲がった角の頭目の雌水牛の口の中に入り込む度に、水牛の飼い主は女たちに伝えた。女たちはそのことを知って、星占いを呼び、前回と同じように言って、宮殿の中の皆が病気のふりをした。そこで Caw;pha.longKhunKom: は星占いを呼んで尋ねた。星占いは、前回と同じように、女たちが言いつけてあるので、星占いは王に対して「曲がった角をもつ頭目の雌水牛を神に生贄として捧げなさい。」と言った。曲がった角をもつ頭目の雌水牛は、子供を呑み込んで逃げて行き、Ka.le;/Weng;Sä に達し、I,Naang:Pum の水牛の群れの中に入った。》(p. 14)

以上が女性の嫉妬心に基づく策略に星占いが加担した場面であるが、中国軍の指揮官が Caw;longSäkhaan,pha. の居る Weng;Ce;laan. 攻略を狙って考えた計略に加担した星占いもいる。シャン (Tay) の大王 Caw;longSäkhaan,pha. もその計略にはまったく気付かず、中国人星占いを完全に信用し、とても喜んでいる。

(18) 《その時中国の指揮官は Weng;Ce;laan. を占領するための計略を考えて、一人の星占いに伝えた。その星占いには Weng;Ce;laan. に住んで、他の人が(町から) 逃げ出すようにするよう命じた。そこで中国人の星占いは Weng;Ce;laan. に来て家を建てて住み込んだ。Caw;longSäkhaan,pha. は中国人の星占いを呼んで、国のこと、自分のことにつ

いて聞き、これから先どうであるのか、良いのか、悪いのか尋ねた。そこで中国人の星占いは、いろいろと占って「この Ce;laan. の町にはこれから先、平穩で有名になるようなものは何もありません。」と言った。そこで Caw;longSäkhaan,pha. は「では、平穩で町を造るにふさわしい場所があるか占ってみてくれ。」と言った。星占いは、占って「この北の 2～3tëng,<sup>52)</sup> の所で Maaw: 河の北側に町を作れば、銀、金が出る井戸が町の真中にあります。これまでよりもずっと良く、何百倍、何千倍も有名になります。」と答えた。Caw;longSäkhaan,pha. は「分かった。」と言った。725 年<sup>53)</sup> に至り、Weng: Ce;laan. を出て Weng:Ta;sop:u を建設した。この町を造るに当たり、中国人の星占いは、(予め) 土の中に隠しておいた金の鍋を掘り出して Caw;longSäkhaan,pha. に見せた。そこで Caw;longSäkhaan,pha. は「占いの通りだ。」と言って、とても喜んだ。》(p. 27)

ここまでくれば、なにやら現代政治と重なって見えてくる人も多いかもしれないが、ジャン (Tay) 語で書かれたクロニクルにこのようなことが書かれていることは間違いない事実であって、不思議に思われると同時に、興味の尽きないところでもある。また、中国人星占いが中国皇帝と喧嘩になって、中国を追放されたが、センウィーに移り住み、時のセンウィー王に大歓迎された話も出ている。

(19) 《その頃中国では Min.kum,ye, と名乗る有名な星占いが一人いて、この人が Caw;Wong.te,hösëng と喧嘩になった。そこで (Caw;Wong.te,hösëng は) 星占いを

を非難して追放したので、(その星占いは) Mäng:Sënwi に下りて来て住んでいた。Caw;longSähom,pha.<sup>54)</sup> はこの星占いの Min.kum,ye, を呼んで、どこに町を建設したらよいかを占ってもらった。そこで中国人星占いは、その場所を示した。その場所とは、西の方で、Laang: 河が Tu; 河に合流する地点である。そこで 1024 年<sup>55)</sup>、タイ暦 mäng:haw の年に、Caw;longSähom,pha. は Laang: 河の東側を離れて Weng:Sop:pong,tu; に移り住んだ。Caw;longSähom,pha. はこの中国人星占いをとても気に入って、たくさんの褒美を与え、Mäng:Wün: の王とした。このとき以来、Mäng:Wün: は Mäng:Sinkhu,ye, と呼ばれるようになった。》(p. 47)

以上が本書に現れる星占いに関する記述のすべてであるが、先に見てきた精霊の場合と違って、何か一風変わったウラのある存在として描かれている。また、その裏には中国の影も見えており、(14) 及び (15) の引用文の中で精霊が反中国的であるのとは対照的である。

## 5. 結論

以上、ジャン (Tay) 語で書かれたセンウィー・クロニクル解題の第二回目として、その中から、精霊信仰や星占いなど、彼らの政治・社会生活を支えている精神的側面に関する記述を探ってみた。これらの記述から明らかになったことは、まず第一に、本書は仏教とはまったく関係のない背景の中で書かれていることである。第二に、精霊や星占いは王位の継承や国の政策決定に深くかかわっていることである。特に精霊は王位の継承やそ

52) 1tëng,= 約 2 マイル。

53) 2 西暦 1363 年。

54) Sënwi の新々第 3 代の王。

55) 西暦 1662 年。

の権威付けに深くかかわっている。第三に、精霊は基本的に“良い”存在として描かれているのに対し、星占いはどちらかと言えばあまり“良くない”存在として描かれている。ちなみにシャン（Tay）文語文では *taay* “死亡する”の婉曲な用語として緬甸語由来の *naat;ywa,caam*，“霊界に召される”と云う表現がよく使われる。

今後は本書に書かれていることが事実かどうかをしっかりと確認することが先ず必要である。歴史を専門としない筆者がそのような確認をする術を知らないが、単純な感覚として、どう見ても事実と考えられる事柄は少ないように思われる。しかし、単に事実でない、ということだけで、本書の価値がないということにはならない。なぜならば、こうしたシャン（Tay）語で書かれたものが存在すること自体に何らかの意味があるからである。ここに書かれた事柄が大部分事実でないとするならば、では、どうしてそのようなことが書かれたのであろうか、その背景を探ってみることはきわめて重要である。

### 参考文献

- 新谷忠彦（編著）（1998）『黄金の四角地帯—シャン文化圏の歴史・言語・民族』慶友社
- 新谷忠彦, *Caw Caay Hân Maü* (2000) 『シャン（Tay）語音韻論と文字法』, アジア・アフリカ言語文化研究所
- 新谷忠彦（2003）「センウィー・クロニクルに見られる「タイ国」像（I）—王の資格をめぐる—」, 『アジア・アフリカ言語文化研究』66号, pp. 275-298
- 新谷忠彦（2004）「チェントウン再訪の旅」, 『通信』111号, pp. 3-18
- 新谷忠彦（監訳）（2005）『センウィー王統紀』, ILAEP

原稿受領日—2006年7月7日  
掲載決定日—2007年4月12日